西南学院大学　国際文化論集　第37巻　第２号　49－75頁　2023年３月

『近代化する九州を生きたキリスト教 ― 熊本・宮崎・松山・福岡』を読み解く

塩　野　和　夫

日本組合基督教会史に関する研究成果を『日本組合基督教会史研究序説』（新教出版社）として出版したのは1995（平成７）年３月である。この刊行は組合教会史に続く研究活動への取り組みを要請していた。

熟慮の末に候補として考えたのはアメリカンボードに関する研究である。具体的にはボストンで資料収集に当たるアメリカンボード総体に関する研究[1)]と日本の一地域，すなわち九州と四国における活動を対象とする研究である。そこで，1996（平成８）年度西南学院大学特別研究（C）に「アメリカンボード日本ミッションの地域活動に関する研究 ― 初期の熊本・宮崎ステーションと松山ステーションの場合」を応募したところ採用された。

それ以来，日本の一地域におけるアメリカンボードの活動を対象とした研究に取り組み続けた。その成果を１冊の本『近代化する九州を生きたキリスト教 ― 熊本・宮崎・松山・福岡』（教文館）（以下，『近代化する九州を生きたキリスト教』と略記する）として出版したのは2012（平成24）年２月である。その間，実に15年余りの歳月を要している。研究者は一つのテーマに関する研究に着手してから研究成果の発表までに様々なドラマを経験する。

『近代化する九州を生きたキリスト教』の場合がまさにそうであった。15年の地道な研究活動の間には思いもしなかった出会いがいくつもあり，予想外の

1) アメリカンボード総体に関する研究成果として下記の著作がある。
『19 世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅰ　1810～1850』新教出版社，2005。
『浅瀬を行く船にも似て ― 19 世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ　1851～1880 ― 』花書院，2022。

展開によって内容も変化を重ねた。そこで思いがけない出来事を織り交ぜながら，『近代化する九州を生きたキリスト教』を読み解いてみたい。そこには研究者に求められる柔軟性と忍耐，そして研究者だからこそ経験できる喜びがある。それらがこれからの研究者への励ましとヒントになればと願っている。

1　現地調査 ― 京都・熊本・宮崎・松山

(1) 京都現地調査

応募した研究テーマに記されていた地域は「初期の熊本・宮崎ステーション」と「松山ステーション」である。そうであるのになぜ京都が，しかも調査訪問地の冒頭に入っているのか。それは同志社大学神学部の図書館にアメリカンボード関連の資料が保管されていたからである。

第１回目の京都現地調査を行ったのは1996（平成８）年７月30日から８月３日である。当初予定していた計画に従って資料のコピーをしていたところ，８月１日になって思いがけない出来事が起こった。次の通りである[2)]。

８月１日になって興奮気味の恩師土肥昭夫先生が「大変なものが出て来た。作業を中止して私の研究室に来るように」と声をかけてくださった。「たいていの事には冷静な先生なのに，何があったのだろう」と不思議に思いながら，神学館４階にある先生の研究室を訪ねた。先生の机の上には幅50センチ，奥行き30センチ，高さ40センチ位だっただろうか，古びた風呂敷包みが置かれていた。「塩野，これ何やと思う。これはな，ケーリさんがアメリカに帰国するに際して研究に役立つかも知れないと言って私に託していった史料や。お祖父さんのケーリ[3)]がお父さんのフランク[4)]に託し，フランクが息子のケー

2) 塩野和夫『近代化する九州を生きたキリスト教 ― 熊本・宮崎・松山・福岡』4～5頁。

3) オーティス・ケーリ（Otis Cary 1851～1932） アメリカンボード宣教師として，1878（明治 11）年に来日した。岡山で教会活動に従事した後，同志社で教会史などを教えた。

リ[5]に託した。それを私に預けてケーリは帰国した。風呂敷を解いてゆっくり史料を見たらいい。びっくりするぞ。」私は壊れ物にでも触るように包みを解いた。20冊くらいだっただろうか，整然と積まれた史料が出て来た。土肥先生の前で１冊ずつ丁寧に手に取った私を釘付けにした史料があった。アメリカンボード日本ミッションの年次報告書である。「先生，こんな史料見たことありません。」「そらそうやろ，私も見たことない。ちょっと中を読んでみたが，これまで知られていなかった事実がいろいろ書いてあるようや。貴重な史料や。」土肥先生の了解をいただいて予定を変更し，残された滞在期間の間私はひたすら日本ミッション年次報告書のコピーを採った。

ケーリ文書から見出した日本ミッション『年次報告書』で，コピーを採ったのは次の通りである。

1　*(Annual Report issued in 1888.)*[6]
2　*Annual Report of the Work of the A. B. C. F. M. in Japan, Ending April 30th, 1889.*
3　*Annual Report of the Work of the A. B. C. F. M. in Japan, Ending April 30th, 1890.*
4　*Report of the Work of the A. B. C. F. M. in Cooperation with the Kumiai Churches of Japan. For the Year Ending April 30th, 1891.*
5　*Report of the Work of the A. B. C. F. M. in Cooperation with the Kumiai Churches of Japan. For the Year Ending March 31th, 1892.*

---

4) フランク・ケーリ（Frank Cary 1888～1973）　1911（明治 44）年に YMCA 教師として来日した後，アメリカンボード宣教師として再来日する。小樽で教会活動に従事したが，戦争中にフィリピンで日本軍に抑留された。戦後は神戸女学院等で働いた。
5) オーティス・ケーリ（Otis Cary 1921～2006）　アメリカンボード宣教師として 1947（昭和 22）年に同志社大学へ派遣され，アーモスト館に住む。同志社大学文学部で教えると共に，アーモスト館を学生寮として再開し，多くの学生を育てた。
6) この年度の『年次報告書』には表紙が欠けていて書名が不明である。最初の頁に手書きの記載があったので，それを（　）内に記載した。

6 *Annual Report of the American Board's Mission, co-operating with the Kumiai Churches of Japan, July 1896.*

7 *Annual Report of the American Board's Mission, co-operating with the Kumiai Churches of Japan, May 1897.*

8 *Annual Report of the American Board's Mission, co-operating with the Kumiai Churches of Japan, May 1898.*

9 *Annual Report of the American Board's Mission, co-operating with the Kumiai Churches of Japan, June 1899.*

10 *Annual Report of the American Board's Mission, co-operating with the Kumiai Churches of Japan, June 1900.*

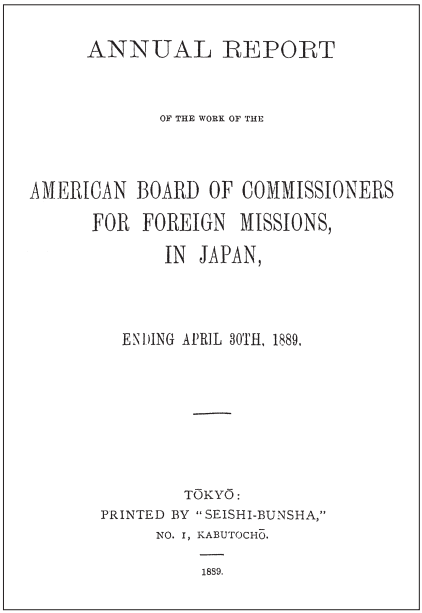
ケーリ文書で日本ミッション『年次報告書』に欠けていたところは，アメリカンボード『年次報告書』で補った。次の通りである。

1 *Eighty-Third Annual Report of the American Boards of Commissioners for Foreign Missions. Presented at the Meeting held at Worcester, Massachusetts, October 10-13, 1893.*

2 *Eighty-Forth Annual Report of the American Boards of Commissioners for Foreign Missions. Presented at the Meeting held at Madison, Wisconsin, October 10-13, 1894.*

3 *Eighty-Fifth Annual Report of the American Boards of Commissioners for Foreign Missions. Presented at the Meeting held at Brooklyn, New York, October 15-18, 1895.*

第２回目の京都現地調査（1997年２月28日～３月１日）ではD.W.ラーネッド（D. W. Learned 1848～1943）による聖書注解書のコピーを採った。膨大な注解書のコピーを３日間では採ることができず，残りは柴田陽子氏にお願いしてコピーを送っていただいた。当時，とりわけラーネッドに注目していたため


ANNUAL REPORT

OF THE WORK OF THE

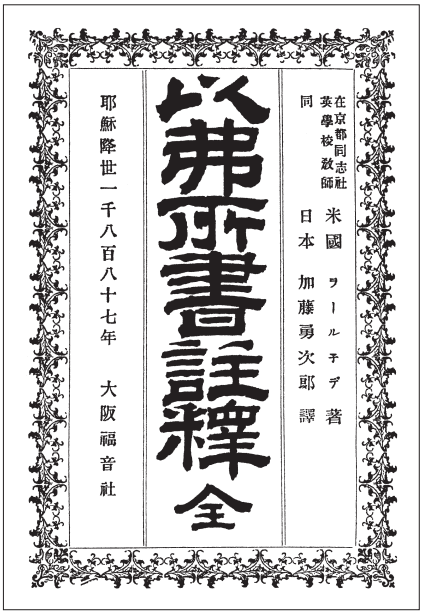
AMERICAN BOARD OF COMMISSIONERS
FOR FOREIGN MISSIONS,
IN JAPAN,

ENDING APRIL 30TH, 1889.

TŌKYŌ:
PRINTED BY "SEISHI-BUNSHA,"
NO. 1, KABUTOCHŌ.

1889.

Annual Report of the Work of the A. B. C. F. M. in Japan, Ending April 30th, 1889.



ラールネデ著・加藤勇次郎訳
『エペソ書註釈 全』
1887年　大阪福音社

である[7]。しかし，これらのコピーが本研究で生かされることはなかった。

(2) 熊本現地調査

熊本には各地にアメリカンボードとその関連事業の跡が残されていた。

それらの調査を中心として第１回目の現地調査を行ったのは1996（平成８）年11月13日～15日である。九州女学院短期大学（当時）に小副川幸孝氏，日本基督教団熊本草場町教会に西八條敬洪氏，熊本フェイス女学院高校（当時）に

7) ラーネッドに関する２本の論文を書いている。
塩野和夫「ラーネッド書簡に見る 1890 年の日本組合基督教会」『国際文化論集』第 11 巻第２号，1997。
塩野和夫「ラーネッド書簡に見る新約聖書の初期注解書」同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師』，1999。

平井栄氏を訪ねた。西八條氏に案内いただいて，「序章　『奉教趣意書』に読む熊本バンド」の冒頭にある「熊本バンド『奉教之碑』」の写真（９頁）を撮ったのはこの時である。西八條氏からは熊本バンドに関する集会が現在も開かれていると伺い，熊本における熊本バンドへの関心の高さを教えられた。熊本フェイス女学院高校の校舎からは熊本女学院当時の雰囲気が伝わってくる気がした。水前寺公園近くのジェーンズ亭と熊本洋学校跡地に建つ熊本県立第一高校も訪ねた。県立第一高校清香会の岩﨑逸子氏はしばらくして資料を送って下さった。

第２回目の熊本現地調査は1997年５月３日に行った。熊本英学校跡地と熊本女学校の跡地を探すことが目的だった。幸い，熊本市電交通局駅近くに熊本英学校跡地であることを記す案内板を見つけたが，熊本女学校跡地を探すことはできなかった。

2011（平成23）年８月29日に行った第３回熊本現地調査は本書に掲載する写真の撮影を目的とした。脳梗塞の後遺症による右マヒで歩行困難であったために，塩野まりが同伴してくれた。この時撮った写真が「ジェーンズ邸（水前寺公園近くに移設）」（16頁）である。

熊本バンド『奉教之碑』（熊本市郊外花岡山）

ジェーンズ邸（水前寺公園近くに移設）

視覚に訴える写真は文字を主体とした本のイメージを補い豊かにしてくれる。「序章」で訪問調査開始直後に撮った写真とほぼ内容が確定していた時期に撮った写真が使用されている事実は興味深い。

(3) 宮崎現地調査

宮崎県下にはC. A. クラーク牧師（Cyrus A. Clark 1851～1933）が巡回伝道した地域が各地に残っている。そのために訪問する調査対象の地域も広くなった。

第１回目の宮崎現地調査は1996（平成８）年２月24日から26日に行った。この時訪ねたのは日本基督教団宮崎教会で，押川幸夫氏と塩見購読氏に話を伺った。塩見氏からは宮崎市におけるクラーク宣教師の活動を中心に話を聞かせていただいた。宮崎市別府町にある栄町児童公園に設けられているクラーク像[8]の写真を撮ったのはこの時である。塩見氏に案内いただき宮崎市春山墓地でクラーク夫妻の墓碑の写真も撮った。テレビ宮崎が「宮崎市制70周年記念特別番組」として1995年３月11日に放映された宣教師クラークに関する番組の録画を

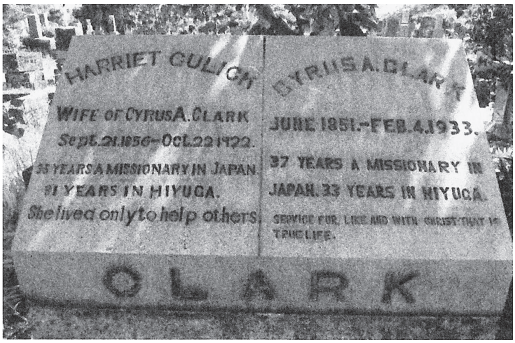
8) 栄町児童公園に設けられたクラーク像については下記にいきさつを記している。塩野和夫『近代化する九州を生きたキリスト教 ― 熊本・宮崎・松山・福岡』247～248頁。なお，子どもたちとの対面で製作されているクラーク像を『近代化する九州を生きたキリスト教』の表紙でも用いている。

見せていただき，興味深かった。

第２回目の宮崎現地調査は1997年３月４日～６日に行い，日本基督教団都城妻ケ丘教会に久保亨氏，日本基督教団高鍋教会に安藤恵三氏，日本基督教団延岡城山教会に大山修司氏を訪ね，話を伺った。安藤氏には宮崎県木崎町椎木にある石井記念友愛社を案内いただいた。

第３回目の宮崎現地調査は1997年11月12日～15日に行い，日本基督教団飫肥教会に林健二氏，日本基督教団小林教会に山村尚道氏，日本基督教団都農教会に久多良木和夫氏を訪ね，話を伺った。都農教会では1997年６月10日に放映された宣教師クラーク夫妻に関する番組の録画を見せていただいた。重ねてク

クラーク像（栄町児童公園）



クラーク夫妻の墓碑（春山墓地）

ラーク夫妻のテレビ番組の録画を見せていただいたため県民に与えたクラーク夫妻の影響力の強さを実感した。

2011年９月６日に第４回目の宮崎現地調査を行った。この時の目的はただ一つ，塩見氏から伺っていた事実を確認するためである。塩見氏によると「宮崎市内でただ１か所，個人の名前が通りの名称になっている道がある。それがクラーク通りである。それほど宮崎市民に与えたクラークの影響は大きく，彼は市民から親しまれていた」[9)]。ようやく見つけた道路標識「クラーク通り」の写真を撮った。

石井十次資料館（石井記念友愛社）

道路標識「クラーク通り」

9) 道路標識の「クラーク通り」については下記を参照。
塩野和夫，前掲書，248 頁。

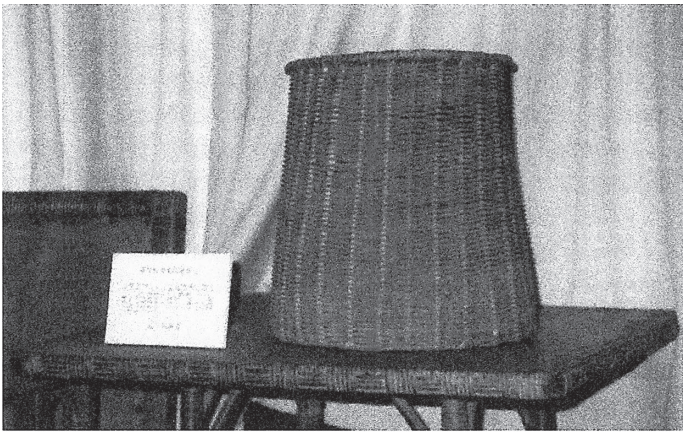
(4) 松山現地調査

松山現地調査は1997（平成９）年２月24日～26日に行い，松山城南高校に小池ミチ子氏，松山東雲女子大学に高尾哲氏を訪ねた。

小池ミチ子氏からは「創立者ジャドソン女史（Cornelia Judson 1860～1939）の影響が強く，現在もその指導を生かした教育に取り組んでいる」と伺い，校内を案内いただいた。前庭にある「ジャジソン女史之像」,「松山夜学校の製作品」,「労研饅頭（ケース)」の写真はその時撮らせていただいたものである。高尾哲氏からは創立当初に果たしたアメリカンボード宣教師の貴重な働きについて説明を受けたうえで,「宣教師の貢献を貴重な財産として学院は現在も継承している」と伺った。

現地調査と並行して，ケーリ文書に記されていた1800年代後半の熊本・宮崎・松山ステーションの翻訳を進めた。その際に現地調査で身に付けた土地勘が意外と役立っただけでなく，解釈する際に各地で聞かせていただいた話が重要な意味を持つこととなった。

ジャジソン女史之像



松山夜学校の制作品

労研饅頭（ケース）

２　翻訳と解説

(1) 熊本ステーションの場合

熊本ステーションに関しては「１－１　熊本ステーション第１回年次報告」から始めて11回の報告を翻訳している。

「１－１　熊本ステーション第１回年次報告」(『1888年度年次報告』) を見ると，当時すでに熊本ステーションの基本的な活動形式は整っていたことが分かる。項目は「(1) 会員，(2) 会員の到着と所在地，(3) 学校の活動，(4) 安息日学校，(5) 熊本中央ステーション，(6) 巡回伝道，(7) 1887年12月31日の統計」である。「１－２　熊本ステーション第２回年次報告　1889年４月30日までの１年間」(『アメリカンボードの日本における活動の年次報告，1889年４月30日まで』) の「(6) 女学校」と「(7) 熊本男子学校」を見ると，ステーションが協力する学校も順調に推移していたことが分かる。「１－３　熊本ステーション第３回年次報告」(『アメリカンボードの日本における活動の年次報告，1890年４月30日まで』) の「(11) 統計　熊本ステーション」を見ると，所属教会の場所として「福岡・熊本・串木野・宮之城・高鍋・田浦・八代」の７か所がある。さらに「１－４　熊本」(『日本組合教会と協力するアメリカンボードの活動報告，1891年４月30日までの年度』) を見ると活動場所として「熊本・八代・鏡・人吉・水俣・田浦・山鹿・福岡・渡瀬・大牟田・宮崎・高鍋・美々津・宮之城・串木野・鹿児島」の16か所を挙げている。当時，アメリカンボードにとって熊本ステーションは九州全体における拠点だったことが分かる。ところが，「１－11　熊本」(『日本組合教会と協力するアメリカンボードの年次報告，1898年５月』) は最終的な熊本ステーションの閉鎖を伝えている。

「２　熊本ステーション関連記事の解説」は史料の分析，執筆者に関する推定，内容の概説をまず行っている。その後に，熊本英学校事件に認められる日本人キリスト者の在り方を４つに分類して考察している。

第１のタイプは蔵原惟敦と彼を支持した学校理事に認められる。熊本英学校

事件に際して，彼らは「知事の命令が不当であっても，知事には従うべきだ」と主張した。第２のタイプは熊本英学校事件に際して蔵原と鋭く対立した。彼らは「仮に知事が法的権利を持っていたとしても，理事会に不当な行為を求めているので，この時点で従うべきではない」と主張した。第３のタイプは熊本女学校の存続を求めて宣教師と対立した人々に認められる。第４のタイプは記事「１－10　熊本　1886」(『日本組合教会と協力するアメリカンボードの年次報告，1897年５月』）の補遺が取り上げていた「熱心なキリスト教徒の一人」に典型的に認められる。

なお，「１　熊本ステーション関連記事の翻訳」は「アメリカンボード日本ミッション『年次報告』における九州・四国地方のステーション記事（1)」[10]に修正を加えたものである。翻訳に当たっては原文の意味を損なわない範囲で分かりやすい日本語とすることを心掛けた。それに対して，「解説」は最終段階で書き加えた。熊本ステーションに関する概説の後に，それに関係した日本人キリスト者を４つのタイプに分けて考察している点が興味深い。

(2) 宮崎ステーションの場合

宮崎ステーション関連記事では「１－１　日向」(『日本組合教会と協力するアメリカンボードの年次報告，1896年７月』)，「１－２　宮崎　1891年」(『日本組合教会と協力するアメリカンボードの年次報告，1897年７月』)，「１－３　宮崎　1891年」(『日本組合教会と協力するアメリカンボードの年次報告，1898年５月』)，「１－４　ミッションの活動地域　宮崎」(『日本組合教会と協力するアメリカンボードの年次報告，1899年６月』)，「１－５　概観　宮崎」(『日本組合教会と協力するアメリカンボードの年次報告，1900年６月』）と５つの記事を翻訳した。

宮崎ステーションは1891年にC.A.クラーク夫妻が宮崎市に着任して成立した。ところが，1896年から1897年にかけて休暇をとったクラーク夫妻はアメリ

10) 参照，塩野和夫「アメリカンボード日本ミッション『年次報告』における九州・四国地方のステーション記事（1)」『国際文化論集』12 巻 1 号，1997 年。

カに帰国する。そのために「１－１　日向」と「１－２　宮崎　1891年」は簡潔に活動状況を記しているだけである。それに対して「１－３　宮崎　1891年」は具体的事例を交えて丁寧に報告している。報告の項目は,「会員」,「概況」,「夜間学校」(英語夜学校・聖書教室),「訪問者の列」,「巡回伝道」(高鍋・砂土原・延岡・都城・飫肥・小林・美々津),「連続集会の計画」である。報告者はクラーク自身だと考えられる。同様に「１－４　ミッションの活動地域　宮崎」や「１－５　概観　宮崎」も巡回伝道や宮崎での各種集会における具体的事例を交えながら報告している。

「２　宮崎ステーション関連記事の解説」では資料及び執筆者に関して考察した上で巡回伝道を初めとする活動内容について分析している。その上で宮崎ステーションの伝道活動に協力した日本人キリスト者を２つのタイプに分けて考察している。第１のタイプは高鍋の伝道者であった野口氏のように伝道活動に参加することによってさらに能力を発揮し成果を上げていった人たちである。第２のタイプは美々津の伝道者のように伝道活動に参加することによって悲惨な結果へと追い込まれていった人たちである。

「１　宮崎ステーション関連記事の翻訳」は「アメリカンボード日本ミッション『年次報告』における九州・四国地方のステーション記事（2)」[11]に修正を加えたものである。それに対して最終段階で加えた「解説」が宮崎ステーションに協力した日本人キリスト者の考察となっている点が興味深い。

(3) 松山ステーションの場合

松山ステーションに関連するものとしては「１－１　松山女学校の報告」(『アメリカンボードの日本における活動の年次報告，1890年４月30日まで』),「１－２　松山」(『日本組合教会と協力するアメリカンボードの活動報告，1891年４月30日までの年度』),「１－３　松山」(『日本組合教会と協力するアメリカンボードの活動報告，1892年３月31日までの年度』),「１－４　松山」

11) 参照，塩野和夫「アメリカンボード日本ミッション『年次報告』における九州・四国地方のステーション記事（2)」『国際文化論集』12 巻 2 号，1998 年。

（『アメリカンボード第83回年次報告，マサチューセッツ州ウースターにて開催，1893年10月10日～13日』），「１－５　松山」（『アメリカンボード第84回年次報告，ウィスコンシン州マディソンにて開催，1894年10月10日～13日』），「１－６　日本に」（『アメリカンボード第85回年次報告，ニューヨーク州ブルックリンにて開催，1895年10月15日～18日』），「１－７　松山女学校」（『日本組合教会と協力するアメリカンボードの年次報告，1896年７月』），「１－８　神戸と松山　1870」（『日本組合教会と協力するアメリカンボードの年次報告，1897年５月』），「１－９　松山」（『日本組合教会と協力するアメリカンボードの年次報告，1898年５月』），「１－10　松山」（『日本組合教会と協力するアメリカンボードの年次報告，1899年６月』），「１－11　概略　松山」（『日本組合教会と協力するアメリカンボードの年次報告，1900年６月』）の11の記事を翻訳した。ただし，「１－２　松山」，「１－４　松山」，「１－５　松山」，「１－６　日本に」の４記事は構成員を記しているだけである。したがって，内容的にはそれ以外の７記事を対象とした。

たとえば，「１－３　松山」は構成員を報告した上で，「伝道活動」と「教育活動，松山女学校・松山夜学校」によって松山ステーションを報告している。「１－９　松山」は「ステーションの開始」と「歴史的回顧」を踏まえて「現在の状況」を分析し，「管理上の問題」，「個人的な活動」，「四国における組合教会の統計」，「松山女学校」を報告している。

「２　松山ステーション関連記事の解説」では史料の整理と分析を行った後に松山ステーション成立当時の状況を考察している。その結果，四国では日本人キリスト者の活動が宣教師の着任に先立っていた事実が明らかになった。そこで，松山ステーションに関わった日本人キリスト者も２つのタイプに分けることができる。

第１のタイプは主体的にキリスト教活動に取り組んでいた日本人キリスト者で宣教師は彼らの活動を補助した。伊勢（横井）時雄や二宮邦次郎がこのタイプに属する。第２のタイプは宣教師の活動に協力した日本人キリスト者で西村清雄がこのタイプに属する。

「１　松山ステーション関連記事の翻訳」は「アメリカンボード日本ミッションの『年次報告』における九州・四国地方のステーション記事（2）」[12]（『国際文化論集』12巻２号，1998）に修正を加えた。それに対して「解説」は最終段階で書き加えたものである。

３　九州・四国におけるアメリカンボード記憶集団への関心

(1) 日本側資料とアメリカンボード

京都・熊本・宮崎・松山への現地調査と並行して各ステーション関連記事の翻訳作業を進めていた。翻訳作業で気づいたことはいずれのステーションにおいても伝道活動と教育活動に取り組んでいた事実である。そこにおける研究対象は宣教師である。

ところが，出版に向けた最終段階で取り組んだ「２　解説」で筆者の関心はいずれのステーションにおいても関係した日本人キリスト者に移っている。アメリカ人宣教師から日本人キリスト者への移行である。この事実は何を語っているのか。実はこのような関心の移行はさらに早い段階においても認めることができる。九州・四国地方におけるアメリカンボードの活動を調べるため現地調査を行った際に関連する日本側資料を多く収集していた。そこで，日本ミッションの年次報告を中心とした翻訳を終えてから，日本側資料も含めた研究を行った[13]。その研究成果が「第１章　九州と四国におけるアメリカンボード記憶集団の特質」である。第１章のタイトルにも見られるようにこの研究での主要な関心は記憶集団，すなわち日本人キリスト者の記憶集団に移行している。

ところで，1880年代から1900年におけるアメリカンボード日本ミッションの九州・四国における活動の日本側資料として収集したものは次の通りに分類できる[14]。

---

12) 参照，塩野和夫「アメリカンボード日本ミッション『年次報告』における九州・四国地方におけるミッション関連記事（2）」『国際文化論集』第 12 巻第 2 号，1998 年。

13) その研究成果が下記の論文である。
塩野和夫「アメリカンボード日本ミッション『年次報告』に見る初期の九州・四国におけるステーション」『国際文化論集』第 13 巻第 1 号，1998 年。

14) 参照，塩野和夫『近代化する九州を生きたキリスト教』34 頁。

A　日本組合基督教会史関連資料

a　日本組合基督教会史をまとめた資料

b　九州・四国で日本ミッションと関係した諸教会の教会史

c　関係諸教会で保存されている資料や伝承

B　キリスト教学校

a　1880年代から1900年にかけて日本ミッションと協力関係にあったキリスト教学校の学校史

b　それらの学校に保存されている資料

C　新聞

a　『基督教新聞』

b　九州・四国各地の新聞

D　研究書

日本側資料を分析すると，九州と四国で記憶集団の違いが明らかとなる。そもそも九州においても四国においても日本ミッションの初期活動においては教会を拠点とした伝道活動と学校における教育活動に力点を置いていた。ところが，九州における記憶集団は教会であり，とりわけ宮崎教会を初めとする宮崎県下の諸教会は設立当初に果たした宣教師の重要な働きを記憶している。それに対して四国における記憶集団は学校である。四国の諸教会も宣教師の働きを記憶しているが，学校においてはさらに重要な存在として宣教師を記憶している。

(2) 記憶集団の違いが生まれた理由

記憶集団の違いが生まれた理由を日本ミッション『年次報告』から見ておきたい。

『年次報告』によると，熊本英学校においても熊本女学校においても生きいきと教育活動が行われていた。ところが，1890年代の排外主義の時期に入ると学校当局と熊本ステーションは距離を広げていく。そのために1897年の熊本女

学校再開後も両者の信頼関係が回復することはなかった。

『年次報告』によると，1890年代には松山女学校においても経済的問題が発生している。しかし，困難なこの時期に女学校と宣教師は信頼関係を保ち，宣教師は献身的に教育活動に協力した。1891年に宣教師によって設立された松山夜学校も日本人青年教師との協力によって維持された。これらの事実はキリスト教学校で記憶され，松山においては学校が主要な記憶集団となっている。

宮崎県下では日本ミッションが各地に居住する伝道者を雇用し，それらの地域をクラークが巡回伝道した。クラークはまた教会の設立と維持に全面的な協力をした。こうして宮崎県下の諸教会ではクラークが記憶されることとなった。それに対して四国では教会における宣教師の働きは周辺であった。そのために宮崎県下における程に教会において宣教師が記憶されることはなかった。

(3) アンドーヴァー・ニュートン神学校における研究発表

1998（平成10）年８月から１年間アメリカのボストンに留学した。1999年４月26日には留学先の一つであったアンドーヴァー・ニュートン神学校（Andover Newton Theological School）で開催された研修会（Faculty Forum）で研究発表の場を与えられた。そこで1996年以来取り組んできたアメリカンボードの九州と四国における活動に関する研究をまとめて発表した。ここでは全体像を提示するためにテーマと区分ごとのタイトルを記しておきたい。

What Divided the Groups in Kyushu and Shikoku that Remember the American Board Japan Mission?

1 Research in Kumamoto, Miyazaki, Matsuyama and Kyoto

1-1 Kumamoto

1-2 Miyazaki

1-3 Matsuyama

1-4 Kyoto

2 Kumamoto Station, Miyazaki Station and the Groups in Kyushu That Remember the Japan Mission
2-1 On the Materials
2-2 How Kumamoto Station carried out its activities and why it closed
2-2a Evangelical activities
2-2b Educational activities
2-2c The reason Kumamoto Station closed
2-2d The groups in Kumamoto that remember Kumamoto Station
2-3 How Miyazaki Station carried out its activities and what groups remember them
2-3a Evangelistic activities
2-3b Educational activities
2-3c The groups in Miyazaki that remember the station

3 Matsuyama Station and the Groups That Remember the Japan Mission in Shikoku
3-1 How Matsuyama Station carried out its activities and what groups remember them
3-1a Evangelistic activities
3-1b Educational activities
3-1c The groups that remember Matsuyama Station

4 What Divided the Activities of the Mission in Kyushu and Shikoku?
4-1 In the beginning the Mission carried out both evangelistic and educational activities
4-2 The reason educational work by Kumamoto Station ended
4-3 The reason why missionaries'evangelistic work was important in Churches in Miyazaki Prfecture

Conclusion

1996年度より着手した九州・四国におけるアメリカンボード日本ミッションの研究は，現地調査・関連資料の翻訳・研究発表を重ねて，1998年度には当面の研究成果を公にできるまでに至っていた。1999年４月にはアメリカの神学校で与えられた研究発表の場でそれを公表することもできた。そうであるのに，帰国後にそれらをまとめて１冊の本として出版することはなかった。

何が問題であったのか。核心となる研究成果に公にしながら，どのような課題があったのか。最後に如何にしてそれらを克服し，１冊の本として研究成果の発表に至ったのかを明らかにしたい。

４　いくつもの課題を克服して

(1) 研究関心の分化

九州・四国におけるアメリカンボード日本ミッションの研究成果は直後に１冊の本として公にできなかった。一つの理由はアメリカンボードをめぐる研究関心の分化である。

実は個別事例として九州・四国におけるアメリカンボード日本ミッションを研究課題とする前から取り組んでいた研究があった。『ヘラルド』誌（*Missionary Herald*）に掲載されている日本関連記事の翻訳である。その研究成果は順次『国際文化論集』に掲載していた[15]。翻訳した一記事「記事八　箱館描写（一八五五年三月号）」が北海道新聞に取り上げられ，「米国政府によるペリーの公式な遠征記が出た一八五六年より前に書かれた貴重な文献」として紹介されたことにより意外な方向に展開する。

1998年８月から１年間にわたるアメリカ合衆国ボストンへの留学における目

15) 次の通りである。
塩野和夫「ミッショナリー・ヘラルドの日本関連記事（1）」『国際文化論集』第 10 巻第 1 号，1995 年。
塩野和夫「ミッショナリー・ヘラルドの日本関連記事（2）」『国際文化論集』第 10 巻第 12 号，1996 年。
塩野和夫「ミッショナリー・ヘラルドの日本関連記事（3）」『国際文化論集』第 11 巻第 1 号，1996 年。

的もアメリカンボードの研究であった。ただし，この時はアメリカンボードの総体を研究対象とし，具体的には「19世紀アメリカンボードの宣教思想」に取り組んだ。帰国してからは，順次その研究成果を発表している[16)]。

同志社大学の恩師土肥昭夫先生（1928～2008）からは西南学院への赴任に際して「西南学院は間もなく100年史編纂作業に取り組む。その際に関らず塩野を必要とする時がくる。ええか，必要とされたならば必ず応分の仕事をするんやで!!」と指示されていた。先生の助言もあって2005年から2013年まで西南学院史の編纂事業に関わっている。

このような研究対象の分化もあって，九州・四国におけるアメリカンボード日本ミッションの研究を進めることはできなかった。

(2) 怪我と病気

第２の理由は怪我と病気である。

2003（平成15）年１月に信号で停止していた時に後ろから追突された。この時の交通事故による障害が怪我である。怪我のため生じた内耳障害によって杖がないと歩けなくなった。それよりもつらかったのは眼振による目眩である。目眩によって日本語文献も英語文献も読めなくなっていた。１年後にある程度日本語文献を読めるようになってからも英語文献は読めなかった。さらに耳鼻

---

16) Kazuo Shiono, The A. B. C. F, M.'s Philosophy of Missions in the 19th Century (1),『国際文化論集』第 15 巻第 1 号，2000 年。
Kazuo Shiono, The A. B. C. F, M.'s Philosophy of Missions in the 19th Century (2),『国際文化論集』第 15 巻第 2 号，2001 年。
Kazuo Shiono, The A. B. C. F, M.'s Philosophy of Missions in the 19th Century (3),『国際文化論集』第 16 巻第 1 号，2001 年。
Kazuo Shiono, The A. B. C. F, M.'s Philosophy of Missions in the 19th Century (4),『国際文化論集』第 16 巻第 2 号，2002 年。
Kazuo Shiono, The A. B. C. F, M.'s Philosophy of Missions in the 19th Century (5),『国際文化論集』第 17 巻第 1 号，2002 年。
Kazuo Shiono, The A. B. C. F, M.'s Philosophy of Missions in the 19th Century (6),『国際文化論集』第 17 巻第 2 号，2003 年。
Kazuo Shiono, The A. B. C. F, M.'s Philosophy of Missions in the 19th Century (7),『国際文化論集』第 18 巻第 1 号，2003 年。

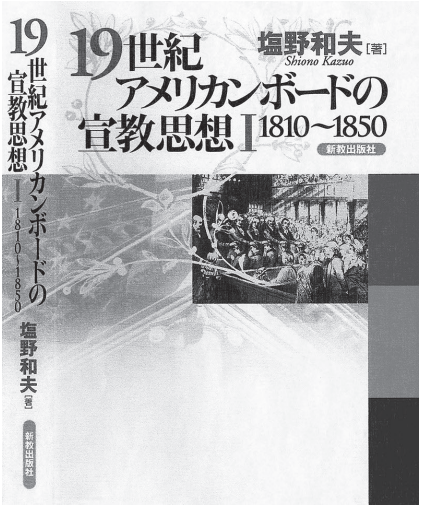
咽喉科の医師からは「当分の間，飛行機に乗ることを禁止する」と言われた。実際，10年間くらいは飛行機に乗れなかった。

2006（平成18）年６月と2009（平成21）年１月には脳梗塞により入院した。重ねて起こした脳梗塞により両手両足が麻痺し，特に右足の麻痺がひどかった。そのため大学の産業医からは厳しく職務制限を受け，限定された範囲で大学の業務を担当した。そのような環境にあって研究活動にも制限を加えざるをえなくなっていた。

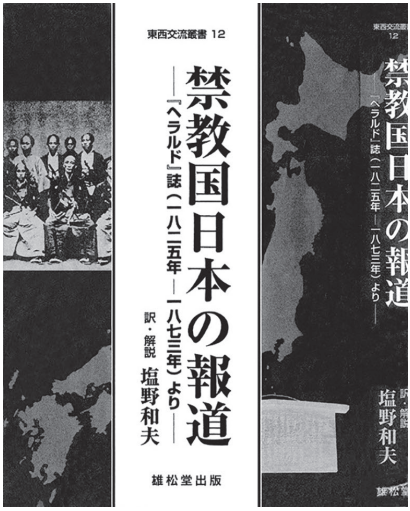
怪我と病気による様々な制限が加えられるなかで，可能な範囲で少しずつアメリカンボードの研究に取り組み続けていた。こうして，２つの研究成果を公にすることができた。以下の通りである。

『19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅰ　1810～1850』新教出版社，2005年。

『禁教国日本の報道 ―『ヘラルド』誌（1825年～1873年）より ―』雄松堂，2007年。



19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅰ
1810-1850



禁教国日本の報道
―『ヘラルド』誌（1825年～1873年）より ―

けれども，九州・四国におけるアメリカンボード日本ミッションに関する研究を公にすることはできなかった。そこには解決できていない研究上の課題が残されていた。

(3) 研究対象を変える

怪我と病気による障害を抱えた体となってからも細々とアメリカンボードの研究を続け，２冊の研究成果を公にできた。しかし，その間も研究をめぐる悩みは深まるばかりであった。

それはアメリカンボードの研究に関する悩みであった。主要な研究であった『19世紀アメリカンボードの宣教思想１　1810－1850』（以下，『19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅰ』と略記する）は続編を想定していた。しかし，障害を抱えた体で研究の継続は可能なのか。それに飛行機に乗れないため資料調査にアメリカへ行くこともできない。

悶々としていた時にある同僚の声が心に響いた。彼もその時病を抱えていた。

そんな彼がなぜか私に向かって明るい声でこう言った。

今，自分にしかできないことをする。

「今，自分にしかできないことをする」，この言葉は研究対象に悩んでいた私の心に響いた。「そうか，自分にしかできないことをすればいいのだ」。こうしてアメリカンボード研究を断念し，出版社にはその旨を伝えて了解を得た。こうして2010（平成22）年から「キリスト教教育と私」の執筆に取り組むこととなる[17]。

(4)『近代化する九州を生きたキリスト教 - 熊本・宮崎・松山・福岡』の出版

研究対象を変えることによって悶々とした悩みから解放された。悩むことなく「今，自分にしかできないこと」すなわち「キリスト教教育と私」の執筆に取り組んだ。

そのような日々に，思いもかけなかったひらめきが走る。それは研究から離れたはずの「九州・四国地方におけるアメリカンボード日本ミッションの研究」に関するひらめきであった。解決できていない課題はトレルチ（Ernst Troeltsch 1865～1923）が歴史哲学の基本概念として提示した「個体性概念（Der Begriff der Individualität）」と「総体概念（Der Begriff der Totolität）」から明快であることは分かっていた。すなわち，「九州・四国地方におけるアメリカンボード日本ミッションの研究」は事例研究であり，個体性概念に属する。それに対して総体概念，すなわち事例研究を設定する舞台は何なのか。それをどのように考えれば良いのかがどうしても分からなかった。

ところが，「『近代化する九州』を舞台とし，『そこを生きたキリスト教』を事例研究とすればよい」とひらめきは語っていた。そこでひらめきに従って，

17) 成果として次の 3 冊がある。
塩野和夫『キリスト教教育と私　前篇』教文館，2013 年。
塩野和夫『キリスト教教育と私　中篇』教文館，2015 年。
塩野和夫『キリスト教教育と私　後篇』教文館，2018 年。

「序章　『奉教趣意書』に読む熊本バンド[18]」と「結章　近代化する福岡市におけるキリスト教」[19]という枠組みを作り，これまでの研究成果を枠組みの中に入れた。

こうして2012年に『近代化する九州を生きたキリスト教 - 熊本・宮崎・松山・福岡』（教文館）を出版することができた。

おわりに

並行して取り組んだアメリカンボードに関する３冊の本は作業工程から２つの類型に大別できる。第１の類型が『禁教国日本の報道 ―『ヘラルド』誌（1825年～1873年）より ―』（以下，『禁教国日本の報道』と略記する）と『近代化する九州を生きたキリスト教』である。それに対して『19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅰ』が第２の類型である。

1995年から1996年にかけて翻訳作業に取り組んでいた『禁教国日本の報道』は2005年に作業を再開し，2007年２月に出版した。つまり，作業期間としては前半の２年間と後半の２年間の合計４年間で，その間に８年間の空白期間がある。同様に1996年に着手して1999年に前半の作業を終えた『近代化する九州を生きたキリスト教』は10年間の空白期間を経て2010年に作業を再開し，2012年に出版している。いずれも８年間と10年間の空白期間がある。それに対して『19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅰ』は2000年から2004年に執筆作業に取り組み，2005年に出版している。つまり空白期間がない。

しかし，同じ空白期間でも『禁教国日本の報道』と『近代化する九州を生きたキリスト教』では事情が違う。『禁教国日本の報道』の場合，前半の２年間で翻訳作業は終えていた。したがって，空白期間に緊張感はなかった。ところが北海道新聞の記事を契機として出版社から声がかかり，解説を加えて出版す

18) 「序章　『奉教趣意書』に読む熊本バンド」は『神（ゴッド）と近代日本』（九州大学出版会，2005 年）からの転載である。

19) 「近代化する福岡市におけるキリスト教」は『国際文化論集』（25 巻 1 号，2011）に発表している。

ることとなる。こうして後半２年間の作業に入った。それに対して，『近代化する九州を生きたキリスト教』の空白期間は「どうすればよいのか」と悩み答えを求め続けた10年間であった。その間にいろいろと考えてみたが納得のいく答えには至らなかった。ところが，研究を断念してアメリカンボードとの距離を置いたとたんに不思議とアイデアが浮かんできた。こうして後半の２年間に研究を完成することができた。

したがって，『近代化する九州を生きたキリスト教』の空白期間には『禁教国日本』にはなかった緊張感があった。その上で距離を置くとアイデアが浮かんできた事実を偶然と見るか必然と見るかで見方が分かれる。経験上，私はこれを必然と見るのである。

資　料

資料①『近代化する九州を生きたキリスト教～熊本・宮崎・松山・福岡』

序　章　「奉教趣意書」に読む熊本バンド

第１章　九州と四国におけるアメリカンボード記憶集団の特質

第２章　熊本ステーション関連記事（1888～1898年）― 翻訳と解説

第３章　宮崎ステーション関連記事（1896～1900年）― 翻訳と解説

第４章　松山ステーション関連記事（1890～1900年）― 翻訳と解説

終　章　近代化する福岡市におけるキリスト教

Supplementary Text

資料②『禁教国日本の報道 ―『ヘラルド』誌（1825年～1873年）より ―』

第１部　日米修好通商条約調印までの報告記事

第２部　アメリカンボードの日本宣教開始決定までの報告記事

第３部　高札撤去までの報告記事

解　説

第１部　解説（日米修好通商条約調印までの報告記事）

第２部　解説（アメリカンボードの日本宣教開始までの報告記事）

第３部　解説（高札撤去までの報告記事）

資料③『19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅰ　1810～1850』

序　章　19世紀アメリカンボード宣教思想研究の課題

第１章　アメリカンボードをめぐる状況

第２章　アメリカンボード本部の宣教方針

第３章　宣教師の思想と行動

終　章　19世紀前期アメリカンボードの宣教思想